

リ
ハ
ビ
リ
ロ
ー
ド

昔の方がよかったのはなぜだろうかと言うな。それは賢い問いではない。

知恵は遺産に劣らず良いもの。日の光を見る者の役に立つ。

知恵の陰に宿れば銀の陰に宿る、というのが知っておくがよい。

知恵はその持ち主に命を与える、と。

神のみ業を見よ。

神が曲げたものを、誰が直しえようか。

順境には楽しめ、逆境にはこう考えよ

人が未来について無知であるようにと。神はこの両者を併せ作られた、と。

(コヘレトの言葉 7・10 | 26)

リハビリロード

肺癌です、一番は手術をお勧めします。左の肺ごととります。そう言われ、10月4日に仙台の病院で手術し、10日間ほど入院した。取るところまではしてやれませんが、回復はご本人のリハビリ次第です。そうも言われ、手術の翌日から、病棟階の廊下を毎日歩かされた。朝、昼、晩、歩くことが目的の歩き。ゾンビのよう、行列のように、また巡礼のように、病棟の廊下は、術後の患者のリハビリロードだった。わたしも体力だけを頼りに、熱心に歩いた。

術後2日目には病室を移された。613号室。6床ある内の廊下側東寄りに新しい

ベットが用意された。ウォーキングしながら注意してみると、翌日にはベットが埋まっていた。

「ヤマガミキヨシ」えっ？入口の表札にびっくり。さっそく本人に挨拶すると、ニコニコ顔が返ってきた。

「あした胆のうをとる手術をします。胆のうは皆とるそうです。」ヤマガミさんはわたしより9歳年上の67歳。

彼が来てから、毎朝わたしのベットに読み終えた朝刊と付箋の入った図書冊子が置かれるようになった。術後一週間も経たないうちに、お先に、と言って退院していった。

「妹のところは世話になります。お酒はたしなむ程度ならいいそうです」そう言っただけでもニコニコしていた。

ヤマガミさんは路上生活者支援の炊き出しをやりたいと言って、55歳で早期退職し、自立支援団体のNPO設立にも関わった。競技場の裏手のアパートに独り暮らしをしていた。

わたしの入院は10日間で、おあとが詰まっていますと、追い出されるように退院させられた。

入院中の10日間は独特の日々だった。見舞い不要を予告しておいたので、病院から職場は近かったが誰も来なかったため、気楽で快適だった。入院患者は通常お昼頃より、親族縁者または職場の人たちのお見舞い対応を日課にしていた。その煩わしさのないのが嬉しかったし、入院中ぐらいのんびりしたいと思った。

入院中と同じ病室ばかりでなくリハビリロードや食堂で挨拶するうちに、会話

をする人も何人かできた。自営業だという70代の男性は、転移性の難しい癌で、半年以上の長期患者だった。大学病院からの出張診察医師もやってきていた。しかし普段はびんびんして見えた。食堂での食事の度に、蟹の佃煮など豪華な惣菜をひろげていた。術後普通食がとれるようになる、見ていて羨ましくなり、おれにも何か買ってきてくれと言っては、見舞いに通う家内に怒られた。5日間も三食ごはんが続くとあきてくる。ああラーメンが食べたいな、出ないかな、と独り言をつぶやくと、さっそく聞きつけたむこうのテーブルから、オレはもう半年以上ここにいるがラーメンが出たことはないな、と返ってきた。へへっスマン、と思わず頭をかいて見せた。

40年吸ったからな、と言う向かいのベットの男性は、見舞いに通う奥さんと孫娘にお昼の病院食を毎日食べ尽くされていた。彼も手術で肺をとるとさっさと退院していった。

肝臓を半分切り取るんでネエ、と同年配の男性が食堂でこぼした。大丈夫でしょう、ここは名医揃いと聞きますよと返した。その後早い人で術後の翌日から看護師に付き添われ点滴を引きずりながらリハビリロードに現れるのだが、2、3日しても彼が見えないので気にかかった。するとやっと現れた彼は、点滴をトロトロと引きながらよろけるようにして歩いてきた。アアおれはもうダメだア。わたしを見かけるとまずそう声を上げた。手術台で夢に死んだ人たちが次々にあらわれてなア、アアおれを呼ぶもんやア、おれはもうダメだア。それをくり返した。術前の会話では明るくシャキッとした紳士だったので、やや驚いた。落ち着きますから。わたしはそれをくり返した。無責任な根拠のないなぐさめだった。

職場の元同僚で、すでに勇退していたキシさんが入院してきた。バスの運転手

だった。若い頃に三分の一にした胃を全摘しに来たのだった。手術の前日に夕食のトレイをもってわたしの前に立ち「最後の晚餐」と言っておどけて見せたので、思わず笑った。手術当日は、奥さんと息子孫たちにいたるまでごっそり待合いの食堂に一日中い続けた。皆静かにしている。キシさんはいい家族持ちだなと思っただ。ところが、その後、キシさんはなかなかリハビリロードにデビューしてこなかった。そのことが、わたしは自分の退院する日までの一番の気がかりになっていった。昼間見かける奥さんに容態を聞くこともはばかられた。

自分の退院当日になって、片付けているときに、廊下でようやくキシさんを見とめた。看護師にきつそわれながら、消え入るようによろよろ歩くキシさんだった。

「手術の後よくなってなア」とシヨボシヨボしたか細い声で言った。

「大丈夫ですよ、頑張りましょう」

生きることには必死な顔がリハビリロードにはあふれていた。

退院後のわたしは医者のお命ずるまま、毎日3時間のウォーキングを日課にした。最初はちよつとした坂でもすぐに息が切れて二、三步で立ち止まった。

医者が言うように本当にまた走れるようになるのか。そして好きな剣道がまたできるようになるのか。半信半疑のまま、ともかく仕事に復帰するために、もらった1ヶ月の休暇を毎日懸命にリハビリに充てた。

仕事に復帰しても、呼吸をすることと生きることが直結するような感覚の日が続いた。腹式呼吸を心がけた。徐々にジョギングもおこない、素振りも始めた。

半年後には、道場の稽古にゆっくりと立った。一回ごとの稽古をもらうことへの感謝が実感された。きょうできる立ち会いに感謝。きょういただく稽古に感謝。それから半年後、10年間合格と縁のなかつた七段審査に合格した。十一月末、日本武道館での午後の審査会最後のグループだった。待ちくたびれて、よけいな力が抜けたのがよかったのか。妻は、自分が一緒に来たからだと言った。そんな気もした。たくさんの人に支えられながら剣道を再開でき、七段までいただいで、心底お恵みだと思った。

順調なことばかりではない。仕事は定年を迎え、人間関係の波風を経験した。同じ職場で囑託になったら、態度を一変させる同僚を目にした。かなしいが、くだらないと思った。

おれはおれのやり方で通すだけだ。そう思った。職場のためになる間、働ける間働かせていただくと決めた。

突然の癌宣告と手術から丸2年が経った。運よく再び医者のお世話にならなかった。正確に言えば、再び剣道のできる体を取り戻してから、剣道のできる間は元気に生きていられる時期とすることにした。ヤマガミさんから教えられた気がする。ヤマガミさんは、わたしが退院してしばらくしてから、再入院していた。胃に

できた壁をとる手術をするとのこと。それを皮切りに、術後、癌が肺に見つかり、腸に転移し、脳に移り、それをくり返した。放射線治療と抗癌剤治療を、入退院と合わせてくり返した。見舞いに行くとき髪は毛はなく、抗癌剤のつらさを訴えた。それでも、医者に余命はいかほどかと聞いた、とニヤニヤしながら話した。闘え

と言われて闘うヤマガミさんは素直な戦士だった。そして、ちょうど2年闘って、彼は逝った。

こころざし半ばのヤマガミさんは、どんなにか無念だったにちがいない。

ヤマガミさんが炊き出しを始めたいきさつを語るとき、目頭を熱くしながら必ずする話があった。飲み会帰りの酔ったタクシーの中で、自分は炊き出しをやりたいんだ、と力説したら、その運転手が後日米俵をどーんと寄付してくれたと。わたしはヤマガミさんと夜回りの会で出会った。わたしたちはどこか引きあうところがあつた。

私自身は思うところあつて、東京での学生時代から夜回りと炊き出しに関わってきた。これは人に頼まれるようなボランティアではなかった。私自身が動きたかった。しかしどう動けばよいのかあまり考えもしなかった。ただ、冷たい路上にねむる人に寄り添うことをしたい青年だった。純粹でなまぐさく、生意気でひたむきだった。当時山谷の施設に泊まりながら、インド人の修道士の後について回った。

ヤマガミさんの示した生きるということに、過不足はない。命に過不足はない。順境と逆境の繰り返しの中で、それぞれが自分の生きていることに向き合うだけである。

わたしの今生きていること、それは今できていることの意味だ。大きく深呼吸をし、腹に息をためる。それも喜びである。どんな気負いもない。夜回りをする。人に出会う。立ち会いに向かう。熟練の先生に稽古をいただく。ありがたいと思

う。趣味の農作業をする。土の呼吸をかぎ、作物の命にふれる。仕事で子どもたちと向き合う。好きな怪談話をして怖そうな顔を見る。暑い日も寒い日も月に一度子どもたちと一緒に震災ボランティアで街に立つ。それらがいつ崩れるか。いつか。いつでもか。それも受け入れる。

入院中にリハビリロードで出会った人たちの「生きる」も、それぞれに熱く感じられた。